



協同集会に寄せて

地域活動に力を入れた 思いを語る



2人の実行委員に聞く

全国協同集会実行委員で滋賀地方自治研究センター理事の、中西大輔さんと北川憲司さんに思いを聞きました。2人は第1〜3分科会の合同基調提起をします。中西さんは第2分科会暮らしの自治をきずく。まちよ、次の世代へつなぐがれ！」で、ファシリテーターも務めます。(本紙 岩田)

生活に密着してこそ行政

中西大輔さん

中西大輔さんは、はじめたのは、1年前。賀県庁職員の仕事のかたわら、数多くの地域活動をしていきます。県庁では国体準備室(ラグビーの強化選手)、情報管理、スポーツ振興、子育て支援、水産課(外来魚の問題)、保健所と各部署を渡り歩きました。協同集会に関わりは

「公務員になるために生まれてきた」と言う中西さんですが、最初から公務員になりました。最初は飲み会に行けると、ちゃらちゃらした気持ちだった。行ってみると地域で世話になっていく人たちが、話になっていく人たちが、

「深夜に鍵を開けて他人の家に入る。泥棒みたいなもんですよね。でも、部屋に行くと利用者が動けないので、おかしな感じがして、体がかたくなると、保険料が上がって1回しか来てもらえないと利用者に言われ、返す言葉がなかった。こういうことをなんとかするのが本来の僕たちの仕事。偉そうに基準や監査のチェックをすることではない」

「最初は飲み会に行けると、ちゃらちゃらした気持ちだった。行ってみると地域で世話になっていく人たちが、話になっていく人たちが、

「環境、農業、福祉、医療、図書館運動など、ありとあらゆる人を講師として10年間続けた」

「最近では京都、大阪のベッドタウンとして大津や草津など南側に県外から人が移り住むようになった。京都、大阪から来た人も飲み込んで、滋賀の再発酵ができるかどうか試される。協同集会で地域の今後を考えた」

「泳ぐ」と水に入る。大学の卒業し県庁に入職した頃には、赤潮

「環境、農業、福祉、医療、図書館運動など、ありとあらゆる人を講師として10年間続けた」

「最近では京都、大阪のベッドタウンとして大津や草津など南側に県外から人が移り住むようになった。京都、大阪から来た人も飲み込んで、滋賀の再発酵ができるかどうか試される。協同集会で地域の今後を考えた」

分野を越えた関係性が滋賀の強さ

北川憲司さん

北川憲司さん(69歳)は長年滋賀県庁で働き、退職後、あるべき地方自治の姿を求めて活動しています。

「環境、農業、福祉、医療、図書館運動など、ありとあらゆる人を講師として10年間続けた」

「最近では京都、大阪のベッドタウンとして大津や草津など南側に県外から人が移り住むようになった。京都、大阪から来た人も飲み込んで、滋賀の再発酵ができるかどうか試される。協同集会で地域の今後を考えた」

1年前、実行委員の藤井絢子さん(NPO法人菜の花プロジェクト)の誘いで協同集会の実行委

「環境、農業、福祉、医療、図書館運動など、ありとあらゆる人を講師として10年間続けた」

「最近では京都、大阪のベッドタウンとして大津や草津など南側に県外から人が移り住むようになった。京都、大阪から来た人も飲み込んで、滋賀の再発酵ができるかどうか試される。協同集会で地域の今後を考えた」

「泳ぐ」と水に入る。大学の卒業し県庁に入職した頃には、赤潮

「環境、農業、福祉、医療、図書館運動など、ありとあらゆる人を講師として10年間続けた」

「最近では京都、大阪のベッドタウンとして大津や草津など南側に県外から人が移り住むようになった。京都、大阪から来た人も飲み込んで、滋賀の再発酵ができるかどうか試される。協同集会で地域の今後を考えた」

「泳ぐ」と水に入る。大学の卒業し県庁に入職した頃には、赤潮

「環境、農業、福祉、医療、図書館運動など、ありとあらゆる人を講師として10年間続けた」

「最近では京都、大阪のベッドタウンとして大津や草津など南側に県外から人が移り住むようになった。京都、大阪から来た人も飲み込んで、滋賀の再発酵ができるかどうか試される。協同集会で地域の今後を考えた」

「泳ぐ」と水に入る。大学の卒業し県庁に入職した頃には、赤潮

「環境、農業、福祉、医療、図書館運動など、ありとあらゆる人を講師として10年間続けた」

「最近では京都、大阪のベッドタウンとして大津や草津など南側に県外から人が移り住むようになった。京都、大阪から来た人も飲み込んで、滋賀の再発酵ができるかどうか試される。協同集会で地域の今後を考えた」

名刺の裏面には12もの団体名が

せるための組織のはずなのに、上からものを言ってダメ出しばかり。制度は地域を良くしていく道具なのに、外にも出て行かず制度のことしか言わない。おかしな感じで、地域に思っていて、出るようになって

訪問介護の現場を学ぼうと保健師に頼んで見学。

日中のヘルパーの様子を見に行くつもりでしたが、連れていかれたのは、筋萎縮性側索硬化症(ALS・指定難病2)で、体が動かない人たちの深夜の訪問介護。

午後10時から午前5時まで、看護師と2人で5件の家を訪ねました。

「深夜に鍵を開けて他人の家に入る。泥棒みたいなもんですよね。でも、部屋に行くと利用者が動けないので、おかしな感じがして、体がかたくなると、保険料が上がって1回しか来てもらえないと利用者に言われ、返す言葉がなかった。こういうことをなんとかするのが本来の僕たちの仕事。偉そうに基準や監査のチェックをすることではない」

中西さんはそれまでも地域づくりで、祭りを盛り上げることをしていました。その時、行政の役割が生活に密着していることに気づいたそうです。

「この人たちはずっとベッドで生活している。でも、気概をもって生活している。それを手伝う仕事がある」

協同集会については、「実行委員のワーカーズコープ草津みんなの家の田中紀代子さんには、生活困窮者支援のことを教えてもらうなど、世話になってるので恩返しをしなければという気持ちがある。成功させたい」

NAKANISHI DAISUKE
中西大輔

http://www.facebook.com/daisuke.nakanishi.5/

- 滋賀地方自治研究センター：理事
- しが生活支援者ネット：共同代表
- 一國多制度推進ネットワーク：共同代表
- チヨウチヨの会(滋賀自治体職員ネットワーク)：実行委員
- NPO街かぞえネットワーク
- NPO自治創出プラットフォーム京都もやいなおしの会
- 自治体職員有志の会
- 自治体法務合同研究会
- 医療福祉-在宅看護の地域創造会議
- 地域に飛び出す公務員ネットワーク
- 自治体学会
- 滋賀県庁2館(運営スタッフ) 他